

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 朴 完

本論文は、第一次大戦が近代日本、特に陸軍に与えた衝撃の意味と、大戦を契機とした陸軍の自己改革の過程を、当該期に参謀次長や陸軍大臣の要職にあった田中義一の政治指導と共に論じた論考である。先行研究においても、陸軍が収集した参戦諸国の情報、そこから導き出された教訓といった観点から、大戦と陸軍との関係は論じられてきた。しかし大戦は、広大な植民地を有するほぼ全ての帝国を巻き込んだ長期戦であり、少なくとも三つの大国の帝政崩壊を帰結した。国民からの徴兵で成り立つ軍隊を持ち、天皇との特別な結びつきを謳う陸軍が大戦によって受けた衝撃と、変貌した社会への対応は、より深く多角的に分析される必要があろう。本論文は、国民、天皇・皇室、帝国・植民地といった三つの領域に対し、陸軍側が自らの関係性を再定義してゆく過程を描いた。

本論文が明らかにしたのは次の諸点である。第一に、1914年から1921年まで、参戦諸国へ派遣された全陸軍武官を階級・兵科・国別に悉皆的に調査し、各時期において陸軍が最も注視した戦闘の局面、最も欲していた情報の全内容が初めて検証された(第一章、第二章)。第二に、帝政の崩壊過程を実見した田中や陸軍中央が、陸海軍の統一的運用を最終的に天皇に委ねている軍制上の危険を自覚して改革へと舵を切っただけでなく、国民の後援なしに「天皇の軍隊」であるとの自己規定は成立しないとの危機感から、在郷軍人、青年団員、未教育補充兵、女性、植民地の人々へと、陸軍が接点を持つべき国民の内実を再定義してゆく過程を描いた(第三章)。具体的には、在郷軍人や青年団員の不満に対処するため陸軍は、軍人給与の増額、文官に比べて不利に働いていた軍人恩給法の改正に着手する(第四章)。大戦の帰趨は、天皇や皇族が軍事的リーダーシップを採ることへの危険性も浮上させた。そこで田中は、軍事的指導者としてではなく、「軍人の保護者」としての天皇・皇室像を新たに打ち出すべく、軍人援護事業への下賜金、恩給をめぐる天皇への請願に積極的な対応を見せた(第五章)。

第三に、大戦が日本の帝国(植民地)支配秩序に与えた衝撃の意味と、それに対応すべく陸軍が採った方策を分析するため、独自に「朝鮮人軍人」という概念(韓国宮中内の旧韓国軍人、日本の陸軍士官学校で教育を受けた朝鮮人将校、憲兵補助員からなる)を設定した上で、これら朝鮮人軍人への処遇改善がいかに実施されたかを初めて明らかにした(第六章)。

本論文が採用した視角と精度を持つ実証研究は未だなく、その独創性は特筆すべきものといえる。陸軍中央の認識を田中義一で代表させてよいのかなど、残された課題はあるものの、それは本論文が研究史上に持つ価値をいささかも減ずるものではないと考える。よって、本委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと判断する。